

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年8月1日(第1243号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



フォーラム

フォーラム「がんばろう！東北」

被災地復興加速化、社会インフラ整備要望を決議

東北の経済、建設関係団体等で構成する「東北の社会資本整備を考える会」(代表・東北経済団体連合会)は7月16日、秋田ビューホテルを会場にフォーラム「がんばろう！東北」を開催し、東北6県の建設業関係者をはじめ約500名が出席した。

フォーラムでは冒頭、東北経済団体連合会の高橋宏明会長が開会挨拶に立ち、道路等のインフラ整備が進んでいる一方で全国で26万人が避難生活を余儀なくされていること、農業、水産業の回復が震災以前の基準に達していないとの認識を示した。また、復興予算無しでは長期化する東北における道路建設事業を速やかに進めるための復興予算確保を訴えていく必要性を述べた。

また、来賓挨拶では橋口昌道秋田県副知事が被災地復興事業において課題が残っていることと併せ、豪雨、豪雪被害が度々発生していることから国土強靱化や多極分散型の国土づくりの実現が東北復興に不可欠であると述べ、高速道路整備、秋田空港の機能強化などの推進に対する協力を呼びかけた。

来賓挨拶に続いて、和田テエコ北秋田市商工会女性部部长、尾花沢観光物産協会の戸津奈穂子氏による意見発表、日本水フォーラム代表理事の竹村公太郎氏による基調講演が行われ、フォーラム最後、復興事業の確実な予算措置、高速道路などの社会インフラ整備促進をはじめとした6事項の要望が決議された。

秋田県から1団体・1企業が受賞

建設業社会貢献活動推進月間中央行事

7月24日、東京都の経団連会館において、(一社)全国建設業協会が主催する「平成26年度建設業社会貢献活動推進月間中央行事」が行われた。

全建では、公共事業の必要性、計画的な社会基盤整備はもとより、地域の基幹産業として地域経済・雇用等の維持並びに災害復旧活動等に貢献している建設産業の正しい姿について国民・社会からの理解・認識を醸成するため、毎年7月を「建設業社会貢献活動推進月間」と定め、各都道府県建設業協会・会員企業と連携し、地域建設業界の実践している幅広い社会貢献活動を、国民・社会に広くアピールするとともに、公共事業への理解を深める活動を展開しており、その一環として、中央行事を開催し、社会貢献活動を行っている団体及び会員企業を表彰している。

今年度の表彰では、秋田県から社会福祉活動において(一社)秋田県仙北建設業協会、環境美化活動において(株)山脇組が受賞した。

また、表彰式の後、(一社)山梨県建設業協会、朝日建設(株)(富山県)による活動事例発表ほか記念講演会が行われた。



仙北支部

安全祈願祭を斎行

(一社)秋田県仙北建設業協会(佐藤吉博会長)は7月10日、大曲エンパイヤホテルにおいて平成26年度の安全祈願祭を斎行した。

同祈願祭には会員事業場、労働基準監督署並びに地域振興局の関係者併せて64名が出席し、一同は、労働災害絶滅を誓うとともに、会員事業場の労働安全を祈願した。

安全祈願祭は毎年7月1日から実施される「全国安全

週間」に併せて行われるもので、建設業の労働災害ゼロを目指し、労働基準監督署、地域振興局並びに建災防秋田県支部の業界が一致協力していくことを目的に行っている。

また、祈願祭終了後は同会場内において、地元大仙市出身の高橋訓之仙北地域振興局長を講師に招いて、『仙北地域経済の発展に向けて』と題して講演会を催した。



秋田・鉄 路の情景

Vol.
21

「複電圧車」

E6系秋田新幹線



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

鉄道の電化には多様な形態がある。電車や電気機関車のモーターは直流で動くが、そのためには交流の電源をどこかで直流に変換しなければならない。

鉄道電化創成期は地上で直流に変換したものを架線を通して列車に送る「直流電化」だった。東京や大阪など大都市圏の鉄道は昔も今も直流電化であり、走っている電車もほとんどが直流区間専用の車両である。

その一方で、送電効率のメリットや技術の進歩から、のちには交流のまま電気を列車に送り、車上で直流に変えて走らせる「交流電化」が、主に地方の路線で主流になってきた。ただ、それすらも単純ではない。日本に発電技術が導入された経緯から、今でも東日本は50Hz、西日本は60Hzの異なる周波数の電気がつくられている。鉄道も同様に、東日本の交流電化区間は50Hz、西日本は60Hzになっている。

かつて夜行列車で秋田から上野に向かう時、栃木県の黒磯駅で機関車の付け替えが行われていた。あれは、黒磯駅が交流電化区間と直流電化区間の切り替え駅であったため、両区間の専用機関車に付け替える必要があったためだ。秋田を経由して青森と大阪を結んでいた特急白鳥は、交流50Hzと60Hz、それに直流の、すべての電化区間を走破するため、すべての電源方式に対応した車両になっていた。

さて、秋田地区などのJRの在来線は交流2万ボルトで電化されているが、東北新幹線などのフル規格の新幹線は列車の高速性能を引き出すために2万5千ボルトの交流になっている。つまり、フル規格新幹線区間と在来線改良区間をまたいで走る秋田新幹線こまちは、複電圧車といって複数の電圧に対応する電気回路装置を積んでいる。

こまちは、7両編成中、架線から電気を取り込むパンタグラフを2基搭載している。国内最高速で走る東北新幹線区間では両方のパンタグラフをあげて電気を取り込むが、最高速度が半分以下になる盛岡秋田間ではパンタグラフは1基で十分に集電が間に合うようで、残りの1基は畳んでしまう。盛岡駅では、はやぶさとの連結解放の他、パンタグラフの上げ下ろしも、見られるはずである。

日本の秘境、秋山郷

藤原優太郎

長い間、心の隅に引っかかっていた、憧れの地である信越国境の秋山郷にようやく行く機会を得た。

「秋山郷」は信濃川の上流、千曲川の支流である中津川の中上流地域にある山里で、新潟県と長野県にまたがり、越後秋山と信濃秋山、二つの地域に分けられている。長野県側は3・11震災の翌朝、長野北部大震災が勃発し大きな被害を蒙ったところで、JR飯山線が通る栄村の奥地にあたる。秋山郷へ行くのに最も便利なのは、飯山街道の新潟県津南町から中津川渓谷沿いの険しい道をたどり、県境の大赤沢峠を越え、苗場山(日本百名山)と烏甲山にはさまれた深い谷間に至るものである。信濃秋山郷は中津川の渓谷を見下ろす急傾斜や谷底に幾つかの集落が点在する。まるでネパール、エベレスト街道のナムチェバザールを彷彿させる。

秋山郷は、江戸時代からすでに平家の落人が開いた秘境として知られ、江戸後期の文政11年(1828)に、越後塩沢町(現新潟県南魚沼市)の織物商人鈴木牧之(ぼくし)が秋山郷を訪れ、『秋山記行』でこの秘境を詳細に記録した。

その紀行文では、当地の人々の暮らしぶりや古老の語りなどが詳しく載せられているが、何より興味深いのは、牧之と秋田マタギが出会った時の聞き書きである。



ぼくが『秋山記行』を読んでもっとも興味をひかれた部分である。江戸後期から明治にかけ、旅マタギと称する阿仁(根子)のマタギが遠く信濃の山奥まで足を延ばし、そこに住み着いて所帯を持ったという事実には驚かされる。

秋山といえば、カモシカや熊などを狩る伝統的猟師が活躍した場として名高い。秋田マタギは落とし穴のような罠を伝達し、熊やカモシカなど獣の猟ができない時は、奥地の魚野川や雑魚川の源流でイワナ漁をし、それを背負って運び上州の草津や奥志賀の温泉場に売って生計を立てていたという。

マタギという狩猟集団は東北各地にいたが、山形県小国町や新潟県三面などにも阿仁マタギの足跡が色濃く残されている所は多い。秋山もそうした渡りマタギの活躍の場であったのだろう。秋山郷最奥の切明の宿で、牧之が秋田マタギと話し合った時、話す言葉に秋田の訛りなどまったく感じず、詳しく猟の話聞くことができたという。

秋田県阿仁地方、根子などに流れ着いたマタギの先祖はもともとどこからやって来た人たちだろうか、そのことが今、自分のいちばん興味ある研究テーマである。ぼくの考えでは、マタギという狩猟集団は本来は裏社会に暗躍した「忍び集団」ではないかということだ。信州から秋田の山奥に流れ着いた一族が、その後、旅マタギとしてふるさと帰りをしたのではないだろうか、という推理小説の題材になりそうな謎を解明してみたいものだ。

想像を絶するような深い峡谷の急斜面を切り開き、そこを生活の場とした秋山郷の先人たちではあるが、稲作や畑作もできない奥深い山里で焼畑農業を行ない、粟やヒエを作り、それを米代わりに食べていたという。米を口にできるのは病人か正月(手に入れることができればの話だが)ぐらいであった。

3・11三陸大津波の翌朝、長野県北部の栄村を襲った震災が世の人々の口端に上ることはあまりなかった。震災の直後、テレビで報道される栄村の惨状や、日本一の積雪量

で有名な津南町や栄村のルポ番組を見ても、何か自分に役に立てることはないだろうかと心を痛めていた。

この7月、秋山郷探訪を計画した一番の目的は日本百名山の一座である苗場山に登ることであった。かなり前から気になっていた山である。

前述の鈴木牧之が越後塩沢から案内人を伴って苗場山に登ったという記録もあった。

山頂周辺が広い湿原になってまるで稲田のような光景であることは有名である。

しかし、山はその平坦な広がりだけではなく、そこに至るまでの険しい登りがほとんど記述されていない。本当に易しい山の印象があるだけであった。今回初めて登ってみて、苗場山の本質を垣間見る思いを強く持った。残念ながら天気が悪く、全山濃霧におおわれ、広大な苗場を見ることはできなかったが、信越の境にこんな素晴らしい山があることを知っただけで大収穫だった。

秋山郷で泊った宿は、苗場荘という民宿で、江戸時代、鈴木牧之が泊った家として知られる。米を作るような平場など少しもない山峡の宿に、ぼくはお土産として秋田米の「あきたこまち」10kgを持ち込んだ。若いおかみさんはとても喜んでくれた。宿で提供されるご飯は雑穀米やきびご飯などで、今ではその方が喜ばれるという。肉類は熊や鹿の肉が美味しく、イワナの骨酒など絶品である。

秋山郷、これからも折をみて訪ねてみたい自分自身の桃源郷だと思つづく思ったしだいである。